

平成31年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

令和2年4月20日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究		
担当者	氏名	所属機関・職	
	1	岩下明裕	スラブ・ユーラシア研究センター・教授
班員	2		
	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	上原良子	フェリス女学院大学 国際交流学部・教授	フランス国際関係史・ヨーロッパ 統合史
	研究テーマ		
フランスおよび西欧における境界地域			

研究成果の概要

当初の予定ではユーラシアにおける三つの国境（中ロ・日ロ・独仏）をめぐる国境観光（ボーダーツーリズム）を企画していたが、学務および新型コロナウイルス対策により、大幅に変更を強いられた。海外渡航も困難であるため、代替策として①礼文島・稚内の訪問による国境地域文化ツーリズム、および第二次世界大戦後の旧日本軍の占領地からの「引き揚げ」の「記憶」をめぐるボーダーツーリズムに変更し、既の実施済の西欧の事例との比較を試みた。

①境界地域の地域文化と交通

北海道の北の国境地帯に位置する有人離島・礼文島は利尻島とともに、初夏のハイシーズンには全国から高山植物やトレッキングを目的とする多くの観光客が集まる。しかしながら、礼文島は利尻島と比較しても、空路や海路の定期航路が不十分であるために、国境を越えたロシアとの越境的ルート、加えて内地へのアクセス手段も限定的であるが故に（フェリーのみ、空路なし）は確立されておらず開放性に欠ける。こうした交通の欠如に伴う国境地帯の閉鎖性は、台湾・中国との交通ネットワークが発達した八重山諸島と対象的である。自然の魅力という点では、双方とも共通しているが、交通網の整備による共生的なモデルが観光・地域振興に求められている。

②内海の政治（鹿児島大学島嶼研シンポジウムのコメント）

奄美群島と地中海との比較し、国際的な内海においては、島嶼地域は、本国の政治指導とは別に、近隣諸国とのパワーバランスを勘案し、近隣諸国との独自かつ多角的な外交政策を推進することが生き残りを図り、好ましい国際環境を形成する上で重要であることを明らかとした。

③ボーダーをめぐる記憶とその継承

歴史上の悲惨な体験を記念館という形で「記憶」し、過去の世代と共有することは世界各地で行

われている。今回、舞鶴・博多・佐世保における引き揚げ記念館および周辺跡地の調査により、各地の引き揚げ記念館は、第二次世界大戦後に新たに登場した国境を越える越境体験を知る場であり、ボーダーがもたらす個人の生の変動を追体験する場として国内におけるボーダーツーリズム、ダークツーリズムとしての重要性を確認した。

特にロシア各地からの「引き揚げ体験」体験は、その経験の悲惨さ故に、あえて体験を語らず、その記憶が家族と共有されない場合も多い。そのため記念館を通じて、家族も没後、故人の体験や家族の記憶を認識・共有・継承される傾向が強く、歴史の記憶の共有において独自の機能を果たしているという。また地方自治体にとっては記念館を観光の一部として、積極的にメディア等を通じて発信するため、「引き揚げ＝舞鶴」というイメージが強調される傾向がある。しかし、実際の引き揚げの実数はこれと大きく異なり、記念館とその活発な活動故に作られた記憶のゆがみも観察される。福岡は、実数では日本最大の引き上げ地であるものの、記念館は存在せず、公的施設の一部に展示があるのみ、体験が風化する傾向が強い。舞鶴にせよ、佐世保にせよ、近年資料館だけでなく、その上陸地点からその後の諸施設の跡地が公園として整備され、慰霊塔の設置等、ツーリズムとして追体験することが可能となっている（記憶の伝播における「土産」の存在も無視できない）。とはいえいくつかの問題点も存在する。特に日本の引き揚げ記念館の場合、被害者としての記憶が強調され、和解や協調の側面は少ない。また記憶の研究の先進地であるヨーロッパ（例えばアルジェリアからフランスへの引き揚げ等）においても、難民である「引き揚げ者」のその後についての研究は乏しい。同じ国籍を有しているにも係わらず、外地から内地への帰還後、就労問題に加え、内地の社会への統合の難しさ、アイデンティティの動揺等、その影響は長期にわたる。越境体験「後」の長期的な検証も今後必要であろう。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

- ・「フランスとヨーロッパ」渡邊啓貴・上原良子編『フランスと世界』法律文化社、2020年、81－92頁。（謝辞なし）
- ・「インターレグ・プログラム」『現代地政学』丸善出版、2020年。（謝辞なし）
- ・「フランス・EU・グローバリゼーション」『フランス史を知る50章』明石書店、2020年刊行予定。（謝辞なし）
- ・「ヨーロッパ統合の先史」「統合の目的と理念」「ECの発足と共通政策」「欧州市民権」「欧州審議会」『よくわかるEU政治』ミネルヴァ書房、2020年（2－7、10－11、180－181頁）。（謝辞なし）

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

- ・科学研究費助成事業・北大・遠藤乾代表 基盤研究（B）（一般）2020～2022年度
「EU危機の史的起源-ヨーロッパ統合史の再定位」（応募中）
- ・科学研究費助成事業・フェリス・上原良子代表 基盤研究（C）2019～2022年度
「フランスにおける新しい地域主義：越境的共生・共益型モデルの可能性」

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。